

松本市文化財
調査報告15

長野県立松本工業高等学校遺跡

緊急発掘調査報告書

1979.3

長野県立松本工業高等学校
松本市教育委員会

序

昭和53年度、格技室の予算がつき、建設の計画を進めている中に、本校の地籍が埋蔵文化財遺跡になっていることを知りました。

建設工事予定もあるので、早速県教育委員会文化課と松本市教育委員会社会教育課に現地調査を依頼し、対策について御指導を受けました。その結果工事着工前に緊急に発掘することになり、この仕事を市教委に御願いすることになりました。市教委から更に中信考古学会に依頼されたわけですが、発掘調査は丁度夏の暑い時期に当り大変御苦勞をお掛けしました。その後発掘された遺物の整理、検討がなされ、こゝに発掘調査報告書として誠意をもってまとめられたことは、本校にとって大変有意義なことであり、また大変喜ばしいことであると思います。

最後に、今回の調査に当り御協力を願った皆様に厚く御礼申し上げます。

昭和54年3月1日

長野県松本工業高等学校長

横 田 邦 男

序

松本工業高等学校地籍は、かねてから埋蔵文化財包蔵地として注目されていた所ありますが、本調査は、同校の格技室建設にともなって、本教育委員会に同地の緊急発掘調査が委託されたものであります。

本教育委員会は、当該調査を中信考古学会に再委託し、遺跡の保護の万全を期しました。

調査は、長野県教育委員会のご指導、学校当局の協力、そして中信考古学会の会員より成る調査団の皆様の熱意の中で進められ、貴重な土師、須恵期の資料を多数得ることができました。

本書は、その結果を集録したもので、今回得られた資料を広く紹介すると共に、文化財保護の一助になれば幸いと存じます。特に、この地の周辺には多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、この遺跡の発掘により、新たな遺跡の確認、解明がなされるとすれば、今回の発掘調査も更に意義深いものになるであろうと考える次第であります。

終りに、今回の調査に際しまして、多大なご協力、ご理解を賜りました関係各位に心から謝意を表して序といたします。

昭和54年3月

松本市教育委員会

教育長 赤 羽 誠

例 言

1. 本書は昭和53年度、県立松本工業高等学校格技室建設に伴う緊急発掘調査報告書である。
2. 今回調査では遺物を伴う遺構の検出はできなかったが、松工高敷地内外より採集されている遺物についてもふれ、本遺跡説明の一助とした。
3. 本書の執筆は大久保知己、倉科明正、神沢昌二郎が行ない、その内容の責任は執筆者にある。
4. 編集は神沢があたったが、写真は小松虔氏のものも使用させてもらった。

目 次

序	1
序	2
例 言	3
本文目次・図版目次	4
第 1 章 調 査 経 過	5
第 1 節 発掘調査に至るまでの経過	神沢昌二郎 5
第 2 節 調査日誌	神沢昌二郎 6
第 2 章 調 査 結 果	7
第 1 節 遺跡の環境	神沢昌二郎 7
1 遺跡周辺の自然環境	7
2 周辺遺跡	8
第 2 節 遺 構	倉科明正 10
第 3 節 遺 物	大久保知巳 14
1 土器および石器	14
2 松本工業高校敷地内採集遺物	24
第 3 章 結 語	大久保知巳 33

図 版 目 次

図版 1 発掘地点全景(東より)	35
図版 2 石垣遺構(北端部分)	35
図版 3 出土遺物(1)	36
図版 4 出土遺物(2)	37
図版 5 松工高敷地内外出土遺物(1)	38
図版 6 松工高敷地内外出土遺物(2)	39

挿 図 目 次

第 1 図 周辺遺跡地図	9
第 2 図 松工高遺跡発掘地点図	11
第 3 図 松工高遺跡実測図	11
第 4 図 北壁、東壁断面図	12
第 5 図 石垣実測図	12
第 6 図 明治 7 年中林村地引絵図	13
第 7 図 松工高遺跡出土遺物実測図(1)	15
第 8 図 松工高遺跡出土遺物実測図(2)	20
第 9 図 松工高遺跡出土遺物実測図(3)	22
第 10 図 松工高敷地内外出土遺物実測図(1)	25
第 11 図 松工高敷地内外出土遺物実測図(2)	28
第 12 図 松工高敷地内外出土遺物実測図(3)	30

第 1 章 調 査 経 過

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過

松本工業高等学校敷地およびその周辺畑より土師器、須恵器片の出土していることは以前より知られていたが、特に昭和50年につくられた新体育館敷地よりは後述のように多くの土器片の出土をみ、校内教師生徒により採集された。

昭和53年6月 県教育委員会関指導主事来松。松工高にて市教育委員会と発掘調査について打合せをする。その結果、旧体育館敷地内ではあるが、前記遺物の出土からみて事前に調査を行なうこととする。

7月8日 中信考古学会、恒川遺跡見学会の折、市教委より発掘調査について下話があり、中信考古学会としても、全面的に協力する意向をかためる。

7月21日 県教委より発掘調査費50万円の計画書ならびに高校教育課より発掘調査依頼状が市教委にとどく。

7月28日 中信考古学会により発掘調査の受託を決定、発掘調査団を下記のようにきめる。

団 長	大久保 知 己		
調査主任	小 松 虔		
調 査 員	中 島 豊 晴	倉 科 明 正	
	山 田 瑞 穂	西 沢 寿 晃	
	三 村 隆	山 越 正 義	
	小 林 康 男	浅 輪 俊 行	
	森 直 義		
庶 務	神 沢 昌 二 郎		

なお、補助調査員としては信大考古学研究会々員、作業員として松工風土研究会生徒を中心とする。

8月4日 松工事務担当者、市教委、調査団との打合せ。

8月6日 発掘調査開始。

第2節 調査日誌

8月6日(日)晴 団長大久保,主任小松,調査員三村・神沢・松工高,顧問矢島先生,以下生徒5名,県ヶ丘高校生3名により,発掘地点内2ヶ所で試掘。盛土および昭和23年火災により焼失した炭化層,基礎コンクリートなどがあり地層は擾乱している。しかし,遺物は土師器片などが出る。しかし明らかに50~60cmは埋土であるので,これをバックホーにより排土するよう手配する。

8月7日(月)晴 午前中,調査員立合いのもとバックホーにより表土を50cm平均排土する。特に東側体育館寄りには砂層が深いので地層確認のため巾約2m,深さ約1.2mに掘りこむ。

この間信大生8名は周辺遺跡の表面採集,松工生6名は用具の準備を行なう。

午後,団長大久保,調査員三村,小林,西沢,浅輪,信大生,松工生,県ヶ丘高校生3名により,北からA~Cトレンチ,東より1~10区と設定して発掘する。礫層の中に土器片があり,AT3では列石が出る。

8月8日(火)晴 調査員倉科,中島,山越,神沢,信大生10名,松工生5名,県ヶ丘高校生3名により前日に引き続き80cmまで掘り下げる。

列石はAT3, BT4, CT5にかけて北東より西南につづき2段から7段に石積みされて更に西南に続いているらしい。途中2ヶ所程旧体育館建設の際破壊されているが,総延長9m余におよぶ。

遺物は50~80cmの礫層中にあり,小破片が多く,特にAT7, BT7あたりから多く出土する。BT7から砥石出土。午後3時30分降雨のため作業中止。

8月9日(水)晴 団長大久保,調査員中島・倉科・小林・山越・浅輪・森・信大生10名・松工生6名・県ヶ丘高校生2名,前日に引き続き発掘し,発掘作業は本日をもって終了する。一方信大生らによって石垣実測を行なう。

8月10日(木)晴 調査員小松・神沢・信大生2人により測量実測作業を行なう。

8月11日(金)晴 調査員大久保・山田・三村・山越・西沢・中学生三村ら3名により,測量および,土器洗い,註記を行なう。

8月12日(土)晴 調査員大久保・神沢により遺物の註記と後片付けを行なう。

(発掘調査協力者名)

大沢哲夫・上条 剛・矢口晋司・里沢豊文・白崎 卓・有賀隆夫・石田成二・中島初美・中桑美
智子・宮城孝之・石渡俊一・馬場長光(信大考古学研究会)・矢島純一郎(松工高顧問)・中村
博明・小宮山真康・百瀬益雄・斉藤秀哉・柴 晴則・上条・北野・小松。(松工高風土研究会)
篠宮 正・旗町一彦・藤林煥康・神田 昭・市岡勇一(県ヶ丘高風土研究会)・三村竜一・野村
直哉・丸山元晴(中学生)

(神沢昌二郎)

第 2 章 調 査 結 果

第 1 節 遺 跡 の 環 境

1. 遺跡周辺の自然環境

本遺跡は松本市の東側やや雨寄りにあり、筑摩山脈につらなる三峯山や峠峠付近を源流として西流する薄川左岸にある。東側1kmあまりには林城山から南西に仁能田山へと続く標高800mあまりの中山性の山が連なり、和泉川をへだてて中山丘陵へと続く。北側には薄川を経て市街地へと続き、西側も住宅地が続いている。

薄川は数次にわたって氾濫したらしく、本遺跡南東の富士電機工場敷地造成の際、1.5mあまり掘削した地点で厚く砂礫層が地積しており、その南の神田、西の筑摩周辺では砂礫土の畑になっている。学校敷地も氾濫原であったため礫が多い。薄川右岸についても同様で、蚕糸公園周辺で鉄塔建設工事が行なわれた際の見所では、表土(耕作土)が約50cm、以下は礫層であった。

湧水は松工高敷地からも自噴しており、筑摩一帯は水位は高い。しかし、最近では自噴する井戸あるいはカマは少なくなっている。右岸をみると、黒町周辺では水位は低く、夏期に自噴している井戸は旧若松町通りで1件、あとは女鳥羽川寄りの中央3丁目の一帯及び旧日の出町通りに多い。

耕作状況を見ると、過去松工高西側は桑畑が多かったが、現在は住宅地となっており、東側には揚水を利用しての田圃と葡萄園、桑園などが残っている。

松工高敷地は薄川より約100m南にあり、標高は約610mを保っているが、旧地形は南西に低くなっており、校庭は石積みで2m近く行なって、平面を保っており、逆に北及び東側は土をすいて敷地を造成している。敷地内には西流する小用水があり、整地以前よりの用水である。

2 周辺遺跡（第1図）

薄川を中心として東山一帯には数多くの遺跡があり、中流域から下にかけては弥生・土師時代の遺跡が多い。

先土器時代は和泉川左岸、弘法山古墳東麓より、ポイントが1点採集されている。

縄文時代は東山山麓から市街地に西下するにしたがって数が少なく、薄川右岸では四谷に加曾利E式に属する完形土器が、埋溝に凹石、大形石棒が発見されており、左岸では林城山西麓の山越遺跡より石棒が、神田地区集落内、筑摩小学校東側よりも土器片が採集されている。他方、南側の弘法山北西麓、平畑遺跡からは石鏃が採集されており、更に南方の山行法師遺跡では縄文式土器と人骨、宋銭の出土をみている。

弥生時代の遺跡はほとんど土師期と重なっているが、右岸では、やや上流では里山辺針塚遺跡より条痕文と引掻文のある壺形土器が出土しており、それより下って清水小学校周辺、県ヶ丘高校敷地、旧松本高等学校敷地北側などと、広範囲より出土しており、左岸では本遺跡のほか、筑摩神社南方地点、富士電機敷地、神田保育園敷地、筑摩小学校東などより、百瀬式から箱清水式にわたる遺跡が存在している。(1)

古墳時代に入ると、右岸では里山辺薄宮周辺に覆石塚群があり、西へ下って清水小学校西側傾丘より小形八稜鏡と灰胎のかかった壺が発見されており、更に南西へくると、旧松本高等学校敷地内に累塚第1号、県薬業試験場桑畑内に累塚第2号の古墳ではないかといわれているものがあり(2)この南側の松商学園敷地内より直刀と半欠の瑞花双鳥八稜鏡が発見されている。

左岸では林城山の麓、標高約640mに御符古墳があり、それより南西方向の山腹あるいは山の突端に生妻古墳、棺蓋山古墳群があり特に棺蓋山古墳群のうち、開成中学校敷地内よりは直刀5本、剣、鉄鏃、有孔砥石などが検出され、また校庭造成の際に調査された中山36号墳からは細歌鏡1面と土師器壺1点を検出している。更にこの西方、中山丘線の北端に前方後方墳の弘法山古墳があり、磯梯内より三角縁獣文鏡1面、ガラス小玉、鉄斧、銅鏃などを検出している。平地にもどって、松工高遺跡より、東方田園内に巾上古墳があり直刀馬具等が発掘により出土している。(3)

土師時代になると前出の弥生時代遺跡と重なっているものが多く、薄川右岸では里山辺の荒井、北小松、本郷の惣社、県ヶ丘高校敷地、薬業試験場敷地、旧松本高等学校敷地、松商学園敷地、四谷、埋溝など一帯にわたり、左岸では本遺跡の他、富士電機工場敷地、神田保育園敷地、神田北、三才、筑摩等巾広い範囲にまたがって土師器、須恵器の出土をみている。

(神沢昌二郎)

註1. 筑摩新聞、松本市、埋蔵品誌 第2巻 歴史上 P.302

註2. " " " P.428

註3. " " " P.428



第1圖 周辺遺跡地図

第2節 遺構

(1)

発掘地点は旧体育館基礎内であり、その北側にはプレハブ建物があるため、限られた範囲である。

まず2地点を試掘したところ埋土の厚い層が判明したため、バックホーで約50cmの深さに表土をはぎ、北よりA～Cトレンチを、東より西へ1～10区を設定した。(第2図)

遺物は埋土内より出土するが遺構はなく、昭和23年の火災時の炭化層とコンクリート基礎が検出されたほか、後述する石垣遺構が検出されたのみであった。(第3図)

(2)

今次発掘調査に於て遺構の発見は一個所であった。遺構は遺跡の中心部にあって、西南から東北にかけて一条の石垣遺構即ち石垣が発掘されたのである。

石垣は西南から東北に地蔵方向43～45度の傾斜をもって、長さ全長9.5m、高さ0.85m(最高)ある。積石の大きさは直径15cmから20cm位で石の長さ(土工用語でともという)20cmから32cmであって、この石は遺跡の北方を流れる薄川の川原石である。

石垣遺構は現在使用されている切園(公園ともいわれ、実測の六百分の一をもって示している)によると、その地籍は松本市大字筑摩字塚添2494番地と同字2495番地との境界に見られるが、石垣はこのうち2495番の畑地の畔にあるところから、この石垣はこの畑地を作る際に耕土の崩壊を防ぐために築かれたものである。

この隣り合う二枚の畑地が何時頃開墾されたものかは判らないが、明治7年(1874年)地租改正の際に地引帳と共に作られた「信濃国筑摩郡第二大区十小区中林村地引絵図」によると、この地籍は隣村三才村の飛地となっていて、地字・地番・面積・持主は全く不明である。

隣接する畑地即ち現在の切園の2494番は、明治7年地引絵図では、中林村地字塚添86番1畝23歩、塚添南86番之内5畝14歩、同所87番2畝21歩、同所87番内7畝15歩、山道北88番4畝7歩、同所89番(面積記入なし)、同所90番9畝17歩、同所91番9畝17歩、同所92番3畝7歩、同93番1畝20歩、同所94番8畝10歩の地籍に相当している。

2495番の石垣(石積遺構の上部を一条の小道が通っていたことが、前記地引絵図に見られるが、この小道は遺跡南側に地籍を中林や筑摩、三才などの村から、家庭用燃料の薪を得るため入会権を持つ山家山(松本市入山辺中入)へ入るために通行した山道があって、この道から分岐した小道が通っていたのであった。

この小道は遺跡の北側を東西に流れる用水堰にそって走る塚添の道に遺跡の東北方で合わさって

たのである。

遺構のある地字地番については既記した通りであるが、明治7年の三才村の地引絵図の存在が判らないので確認することはできないのであるが、慶安4年(1651)の三才村検地帳によれば、この地籍に当たるところとして、山道中畑7畝10歩埋橋(村)金三郎と見えている。

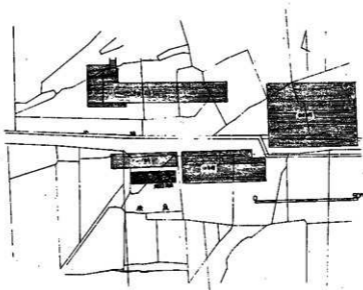
またこの地と隣接した中林

村については、慶安4年の中林村検地帳によれば、地字山道中畑5畝21歩、同所上畑8畝15歩、同所上畑6畝10歩、同所上畑5畝18歩、同所上畑5畝18歩、同所中畑2畝15歩、同所中畑2畝15歩の地籍のうち何れかが、前記地所即ち遺跡地と相接したものと推定される。

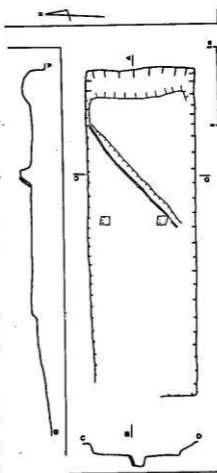
以上によって、石積遺構(石垣)をもつこの地所(畑)は、慶安検地当時既に存在していたことが明らかであり、この石積遺構もその石積の方法が乱石積といわれるものであって、その乱石積もその方法が素人であるところから、農民自身が畑を開いた際に石積されたものと推定する。

その石積の方法から見て中世までは通らないことは、中世の遺構を残している古城跡跡に見られる石垣の石積みの方が普通平石積と呼ばれている石を平にして積み上げて行く方法をとっている。

この場合は、乱石積であって古い石積の方法をとっていないのである。この地方で中世の石積(石垣)の遺構を比較的好く残存している、松本市入山辺中入の中入城(市史跡)、里山辺の林城、東筑摩郡坂北村青柳の青

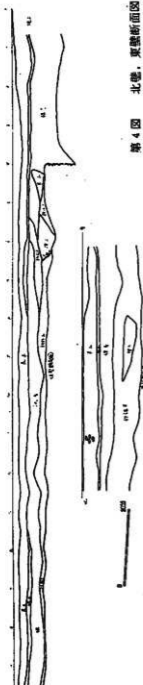


第2図 松工高遺跡発掘地点図

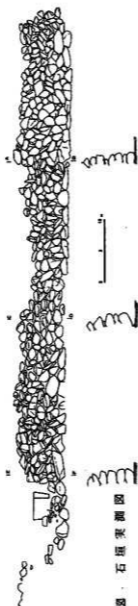


第3図 松工高遺跡発掘図

第4図 北地、東麓断面図



御礼を申し上げる。



第5図 石垣東麓断面図

御城（何れも県指定史跡）などの城跡に見られ、更に年代の下ったものとしては、元和元年(1615)に作られた市内浅間温泉御殿山山麓にある小笠原氏三代の墓地入口に升形をもった石垣がある。これは自然石の平石積ではなく加工された大石による平積の手法が残されている。

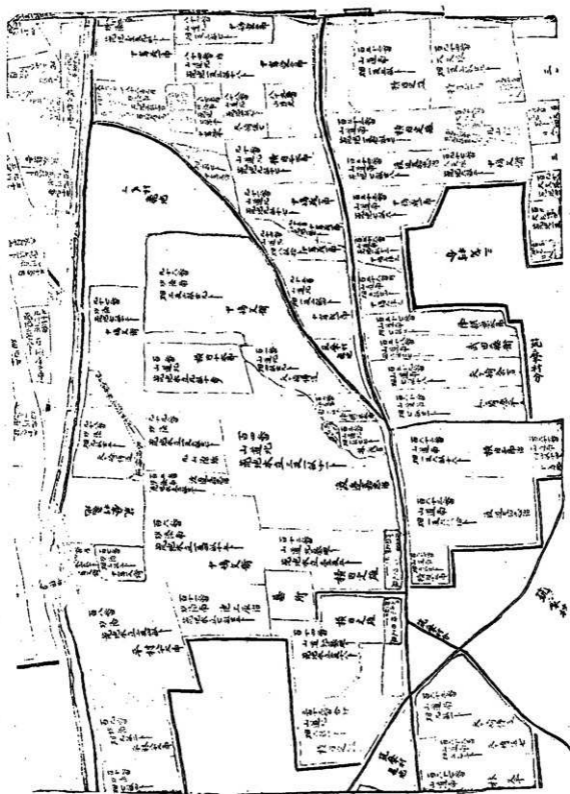
然し桃山時代に築城された松本城跡の石垣の石積の手法は、加工された大小さまざまな石を交ぜ合せた乱石積であるが、本遺跡の石積の手法は自然石無加工の石をもって乱石積としているところから、その築かれた年代を江戸時代の初期頃と推定するものである。

本遺構と直接関係はないが、遺跡の東方林地路に接する附近には、前記地引絵図には「古墓」として記入があり、その古墓の周辺の地名を字「古墓廻り」畑7畝2歩(126番)、その西側の畑地を127番基岸畑1反2畝6歩とあって古墳の所在を示しており、慶安4年の中林村検地帳には、塚田小松下として7筆7反27歩、塚田が5筆4反8畝8歩、合計1町1反9畝5歩の地籍が見られ、この辺を総称して塚田神と呼ばれていた。それから推してこの周辺には数基の古墳がかつてはあったものであろう。

本遺跡出土の土師・須恵器及び周辺出土の遺物とともに古墳の存在とが有機的な関係があるものと考えられる。

本項を終るに当り貴重な史料を提供して下さった松本市筑摩・横内保房、同所横内秀雄の両氏及び塩尻市片丘北熊井・小松克巳氏に対し厚く

(倉科明正)



第6圖 明治7年中林村地引繪圖

参考文献・史料

1. ものと人間との文化史・石垣 — 田淵実夫著 昭和50年
2. 日本の城の基礎知識 — 井上宗和著 — 昭和53年
3. 長野県史蹟名勝天然記念物調査報告
4. 慶安四曆辛卯正月十九日より嘉永四辛亥年まで
信州筑摩郡庄内組中林村横地横(横内秀雄氏所蔵)
5. 慶安四年辛卯正月十九日より安政四丁巳年まで
信州筑摩郡庄内組三才村横地横(塩尻市片丘北熊井 小松克巳氏所蔵)
6. 明治7年信濃国筑摩郡第二大区十小区中林村地引絵図(筑摩 横内保房氏所蔵)
7. 寛政年中、庄内組明細記(松本市埋橋2 河辺義正氏所蔵)

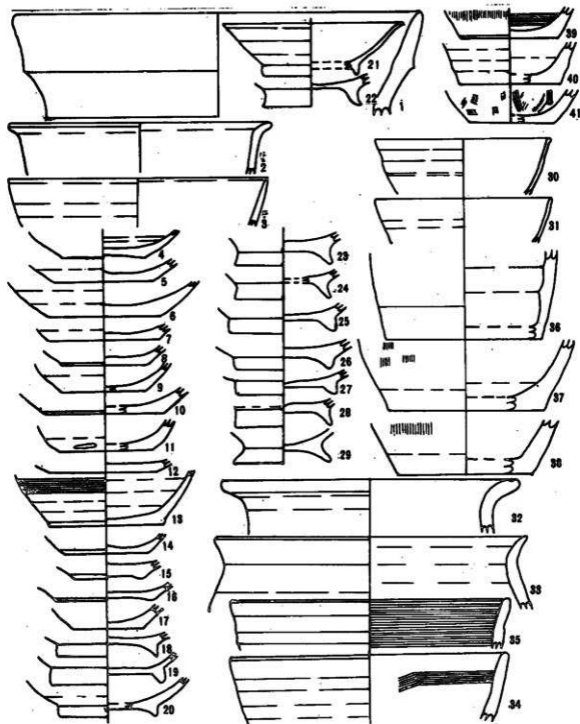
第3節 遺 物

1. 土器および石器

今回調査された、長野県立松本工業高等学校敷地内遺跡(以下、松工遺跡と略す)の発掘地点は、第2図に示す如く、松本工業高校の正面玄関の南東約30mを隔てた、旧プレハブ倉庫の南、在来体育館の西に位置する校庭であった。この度、同所に新たな格技室建設が計画されたため、事前の調査が行なわれることになったものである。トレンチは、南北方向に6mの長さを2mづつに区切って3等分し、北側よりA・B・Cと命名、又、この南北線に直角に交叉する東西方向へは、20mをそれぞれとり、これを2mづつに仕切って10分割し、東を基点として西へ、各区共1~10区と命名し、以降の発掘に備える。

発掘調査によって明らかになったことは、同地が松本工業高校設置以前、畑地であったことであり、表土下約70cm面に、北東~南西方向に走行する、かつての畑地の石垣が発見され、同地がかなりの段差をもつ地形を成している、校地設置のために、多量の土砂が埋められたものであることが明らかとなる。このことは、同校設置以前の周辺在住者からも、容易に聞き得られることでもあった。従って、遺物の包含層の多くは、土砂の自然堆積によるものでなく、人工的な、他からの運搬による埋め立て層であるため、調査によって得られた遺物は、住居址や土壌等の遺構に、直接かかわるものでなく、その意味では、多量の遺物検出にもかかわらず、遺物の前後関係や、時代的な組成として、とらえることのできなかつたのは、残念なことでもあった。

ともあれ、発掘調査によって検出された遺物は、土器の部で種類別について、弥生土器、土師器、



第7图 松工高遺跡出土遺物実測图 (1)

須恵器、灰釉陶器、青磁、白磁、各土陶磁器類の破片で、定形品はなく、それに砥石、キセルの先の部分の金具の以上であった。これらの遺物は、数量的には、土師器、須恵器、灰釉陶器が主体をしめ、本遺跡の時代的な中心を物語るかの様である。以下、遺物の類別を試み、詳述したい。尚、報告書に活用した全資料には一連番号を附した。

第1類土器(第7図1~3)

弥生土器を本類とした。出土量は少なく、その内、資料として活用し得るものは、僅かに3例であった。1は、Bトレンチ(以下、トレンチを省略)・4区(以下、区を省略)より出土。口径29.2cmを数える。かなり大きな壺形土器の口縁部破片で、平縁となり、器厚も1.2cmと厚い。胎土質は良く、丹砂のためか外面は赤褐色となり、内面は暗褐色となる。外傾して開く口縁部の外側に、広い縁どりの稜線がかなりきつく残り、以下の頸部への流れを明瞭にしている。2は、A・3の-80~-110cmの深部より発見された、壺形土器の口縁部破片である。平縁で口径は18.8cm、器厚0.5cmの中厚手で、外面赤褐色、内面は黒色となる。口縁が、垂直な立ち上がりを見せた後、その頂部付近で急に外反して開く器形を示す。3は、A・7の-55~-122の下層より検出された。平縁の口径が18.8cm、器厚は0.4cmとややうすい。杯形土器の口縁部とみられ、内外は赤褐色となり、壁面はよく精製されている。

第2類土器(第7図・第8図4~41)

本類は土師器を一括した。杯形土器が大半をしめ、他に壺形を示すものなどがある。杯は底部が平底となるもの、高台を付けるもの、内面黒色で外面褐色となるもの、内外面褐色となるもの等々多様多様であり、これらをその特徴に応じて分類しながら、整理したい。

A類 4~12 内面が黒色研磨され、外面は褐色となる平底の杯類をまとめた。いわゆる内黒と呼ばれる土師器の杯である。4は、C・4より出土し、内外共に黒色で焼成はよい。底部は6cmで、轆轤が右回転となる糸切底を示す。5は、A・9出土、内黒で外面は褐色となる。底径は7cmで、轆轤回転による底部の寛調整痕が残る。6は、A・5の-50~-75cmより出土、底径8cmで糸切跡が残る。7は、A・9の-50~-60cm出土。底径8cmの糸切底。8は、B・6出土。底径6cmで10と共に糸切底が僅かながら高台状に肉厚となる。9は、B・7の-40~-60cm出土。底径6cmで、底部は10、11と共に切りはなし後の調整をよくし、糸切や寛等の痕跡をのこさない。10は、B・3出土。底径8cm。11は、A・7出土。底径6.2cm。12は、A・7出土。底径7.4cmである。全般に底部よりの器の立ち上がりは、外傾の度を強くして開くが、9、11は、内傾の傾向を示して、早い立ち上がりとなる。

B類 13~17 平底で共に底部に糸切の跡を残し、内外が褐色となる杯類である。13は、A・7の-55~-122cm間の出土である。底径は8cmを示し、器の内外面に轆轤整形痕を残す。又、外面には、1単位7条の欄目沈線が明瞭に残る。14は、A・7の-50~-70cm出土。底径5.6

cmと小形を示し、底部内側の中心部が盛り上がりが高くなる。15は、A・7の-50~60cmの出土。底径5.4cmと小形化し、底部を肉厚としている。16は、A・3の-70~110cmの出土。底径7cm。17は、A・9の-50~60cm出土。底径5cmの小形である。以上、13~17まで、それぞれ轆轤右回転の糸切底となり、器の立ち上りは、14、15、16が外傾して開くのに対し、13、17は、無理のない滑らかな曲線を記す。

C類 18~25 内面が黒色研磨され、外面が褐色となる、高台付の杯形土器が含まれる。18は、A・3の-80~110cmの出土。底径7cmで底部に筥調整の痕跡がある。19は、A・6の-50~75cm出土。底径8cm。20は、A・5の-50~75cm出土。21、23は、A・8。22、24は、A・9。25は、C・3各出土で、底径は20~24が、7cmとなり、25が7.6cmとやや大きくなる。21は、図上復元で、全体を知ることができるが、口径13cm、高さ3.8cmで小形の皿状であり、他と比較して器厚も0.2~0.3cmとうすい。高台は、大別してa、B2種に分類でき、a類に含まれるものとしては、18~21、25が挙げられる。これらは、高台外側をほぼ垂直におろし、内側を斜めに削り取っているが、その手法は、18、20、21が滑らかな曲線の成形を示すのに対して、19、25は、底部内側取付から先端にかけて直線的で肉厚となる。一方B類に含まれるものとしては、22~24があげられる。いずれも付高台で、高台取付部外側を接着をよくするために、押ししながら轆轤回転している。それ故に断面は、外側が大きく削られて弓状の曲線となり、又、内側は内そぎとなるため、高台先端部が外反する様相を呈する。概して高台は高い傾向を示す。

D類 26~29 内外が褐色で、高台付となる杯が所属する。26は、B・8の-50~70cm出土で、底径7.4cm。27は、B・3出土で底径7cmとなる。共に高台内を、轆轤回転による、筥調整痕を残す。28はA・9出土。29はC・8の-50~90cm出土である。共に底径は6.8cmとなる。26は高台が内、外両側より、ゆるやかに細まりながら先端におり、27の高台は、C類の19、25と同様である。又、28、29の高台は、C類の22~24とほぼ同様であるが、29はその特徴的な高台成形が顕著に表現されたものである。

E類 30、31 杯の口縁部破片である。僅か2例で、30はA・8出土、内面黒色研磨され、外面褐色を呈する。口径12.6cmで外面に轆轤整形痕がある。前記したA乃至C類の、いづれかに含まれる口縁部であろう。31はC・7出土、内外褐色土器で、口径は12.6cmである。前記、B乃至D類のいづれかに所属する口縁部とみられるが、両者とも小形づくりである。

F類 32~35・37、38 壺形土器の口縁部及び底部破片をまとめた。32~35が口縁部、37、38が底部である。32は、B・7の-50~60cm出土。口径は21.4cmで、内面灰黒色、外面褐色となり、筥調整はよくない。口縁が頸部の立ち上がりから急に外反して開口する。33は、A・9の-50~60cm出土。内外褐色を呈し、胎土に砂礫を含むが、壁はよく精製されている。口径22cmで、口縁部が頸部で「く」の字状に屈曲し、頸部以下に盛り出す傾向をみせており、口唇上に僅か

な面取りがある。34は、A・2、35は、A・3の-50~-110cm出土で、共に口径は20cmとなる。一見鉢形土器の如くであるが、いずれも広口の口縁部をもつ変形土器の破片とみられ、35にはその気配がみえる。34には、外面に轆轤整形痕が、内面には部分的に刷毛目文が浅く引かれる。35は、口唇に面取りがあり、外面に轆轤整形時の凹帯が横走り、内壁に横位の浅い刷毛目痕が全面に残る。以上、いずれも0.8cm前後の中位の器厚を示す。37はA・7の-50~-70cm出土。底径11.2cmで、内外黄褐色となり、外器面に部分的な縦方向の刷毛目痕が転載する。38はB・8の-50~-70cm出土で、底径は9.6cmとやや小形化する。内外茶褐色で焼成はよく、外器面に縦方向の刷目が軽く残る。共に平底で、無理のない立ち上がりを示しながら、胴部にかけて開いてゆく。

O類 36 鉢形を示す土器で、36が含まれる。1例のみであるが、C・4より出土し、内外茶褐色で焼成はよい。平底で底径は11.2cm、内壁に横位の整形痕をのこし、外壁には轆轤回転整形時に胎土中の砂礫を噛んで記されたものとみられる、筋が1本走る。器に僅かながら、縦方向の刷毛目がかえる。器は、極めて急な立ち上がりを示し、開度すくなく、直線的に口縁へ向う如くである。

H類 39~41 碗形土器を取扱う。共に平底であり、39が内外黒褐色、他は茶褐色となる。39はB・3の-50~-60cm出土。底径7cmで内面に横位、外面に縦位の刷毛目痕がある。40はA・Tの-95~-122cm出土。底径7.4cmで、内外に轆轤整形痕をもち、底部に回転荒削の跡がある。41はA・8出土で、底径は6cm、器の内外に荒削や刷毛目痕の跡を残す粗製土器である。いずれも小づくりで、外傾しながら開くが、41は円滑なのに対し、39・40はその度がやや強い。

第3類土器 (第8図42~73)

本類は須恵器を一括した。器形は、杯、杯蓋、壺であり、杯形土器が多数をしめる。以下分類し、その特徴を記したい。

A類 42~49 杯形土器で、平底となるものを含む。42~49が該当し、いずれも焼成よく、青灰色をとり、すべてが轆轤右回転による米切底となる。42はA・9の-50cm出土、43はA・5の-50~-75cm出土で、共に底径は6.8cmである。44はA・6の-50~-75cm、45はA・8、46はA・9の-50~-60cm出土で、共に底径は7cmを記録する。この中、44の底部は、一旦米切して器を切りはなした後、そのまま再び陶土に器をのせて密着させ、肉厚の状態で再度米切手法で器をはなしている跡がうかがえる。器のバランスをとるための調整かと思われる。47はB・8の-50~-70cm、48はB・3、49はC・2出土で、いずれも底径が6.6cmとなる。49の底部の端は有段となっており、基部から外反して間もなく直に立ち上がる気配をみせる。然し他は一律に外傾の度を増して開く。

B類 50~55 杯形土器の底部で、高台をつけるものをまとめた。50~55が属し、55が外面茶褐色となる他は、すべて青灰色となる。又、内面には一律に回転荒削調整痕がある。50はB・5、51はA・7の-50~-70cm出土で、共に底径は9cmとなり、底部を轆轤回転による荒削調整をして

いる。51の高台は、付高台で接着の跡が残る。52はA・8の-40~-50cm出土で、底径は10cmを記す。53,54はA・7の-50~-70cm出土。底径は共に10.6cmとなり、53には底部が回転寛削されている。55はA・9の-50~-60cm出土。底径は11cmである。高台は50~52, 54がほぼ垂直に、方形状におりるが、53と55は、先端が外反する特徴がある。

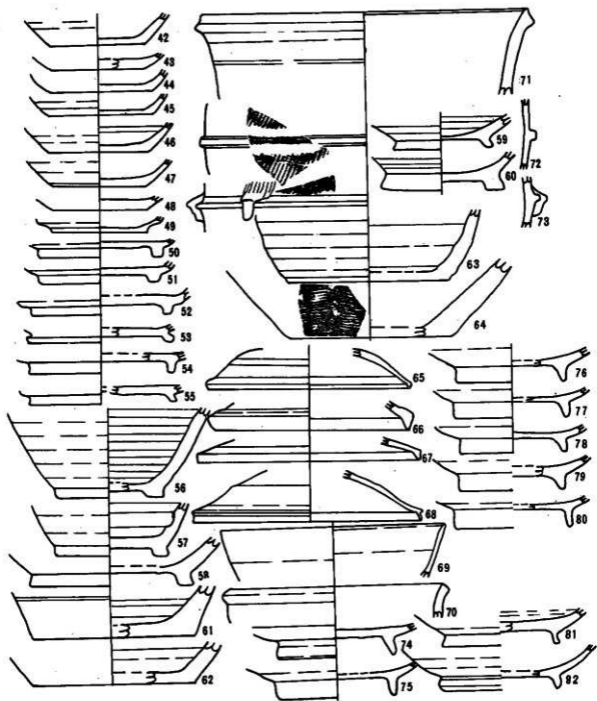
C類 56~63 壺形土器の一群で、高台を付ける56~60と平底となる61~63の2種がある。56はC・3出土。底径7.8cmで、内面に轆轤整形痕をもつ。57はA・Tの-55~-122cm出土。底径は8.2cmとなる。内面に轆轤痕をもち、底径は糸切後の付高台である。58はB・8の-50~-70cm出土で、底径11.6cmとなり、大形の底部を示す。59はB・7の-50cm出土。底径7.2cm。内面は底部中心より螺旋状にはい上る。轆轤回転寛調整痕が明瞭に残り、自然釉が僅かにかかる。60はA・8の-40~-50cm出土。底径は9cm。底部高台内に回転寛削の跡がある。58を除き、他はすべて小づくりの壺形底部を示し、高台は59が細身で端部が外へはりし、56,59が方形状にほぼ直におり、58,60は肉厚となり、僅かに外方へふんばりの傾向をみせる。又、56,57は比較的早い立ち上がりを見せ、他は外傾して胴部への開きを広くする。

61はA・6の-50~-75cm出土。62はB・3の-50~-60cm出土。63はC・2出土で、個体を別にしながら、平底の底径は共に11.6cmである。器の内面に横位の連続轆轤痕があり、63は外面にもあって壁面が縦に波をうつ。61の外面は寛調整されている。器の立ち上がり角度は、共に標準的で、無理のないしりを示す。

D類 64 壺形土器の資料として活用できたものは、64のみであるが、他に、外面に器の叩きしめを行った叩目文を残す胴部破片もある。64はC・4出土で、平底の底径は11.6cm。器の内面はよく精製されており、外面には横位の平行する直線上の叩目文が残る。器は基部より大きく外反して胴部に開く。

E類 65~69 本類は杯、杯蓋をまとめた。杯形土器の口縁部として69、杯蓋として65~68が挙げられる。65はB・3出土。66はB・8の-50~-70cm出土で、杯蓋の口径は、両者共14.6cmである。67はA・9出土。蓋の口径は16.2cm。68はA・5出土で口径は16.4cmとなる。65,67は端部の外側がやや内傾して折れ、内側より斜めにおりてきた器の縁と結ばれて先は尖る。65,67は器厚0.5cmであるが、66はやや太めとなる。68は、その端部のつくりが異なり、一旦張り出した器が小さく「く」の字状に折れてさがり、内側の端部のかえりも鋭く先は尖る。69はA・7出土で口径は16cmである。底部に向い内彎することなく直行する。

F類 70~73 壺形と壺形土器を取扱う。壺形土器は70の1例のみであり、B・4出土で口径は16.4cmを記す。口縁部が僅かに外反し、口唇は斜めに外そぎしている。71は大形壺の口縁部で、A・9より出土し、口径は23.6cmと大きい。器は外反しながら開いており、口唇下を外へはり出させてひさし状となる。外面に轆轤整形痕が残る。72はB・4、73はA・8出土で、共に壺形土器の



第 8 圖 松工高遺跡出土遺物実測図 (2)

胴部破片であり、両者共、胴径は23.6cmとなる。いづれも胴部に補強のためか、粘土紐貼布による隆帯が1条横走り、その上下に、一見、縄文をおもわせる様な、斜行する整った印目痕が全面に残る。73には更に、粘土紐隆帯上に、鉤状の突起物が加飾される。

第4類土器（第8図74～82、第9図83～107）

灰釉陶器を一括する。器形として碗、壺、瓶、鉢が挙げられる。この内、数量的に最も多いのは杯形を示すもので、本類の大半をしめる。分類し報告にかえたい。

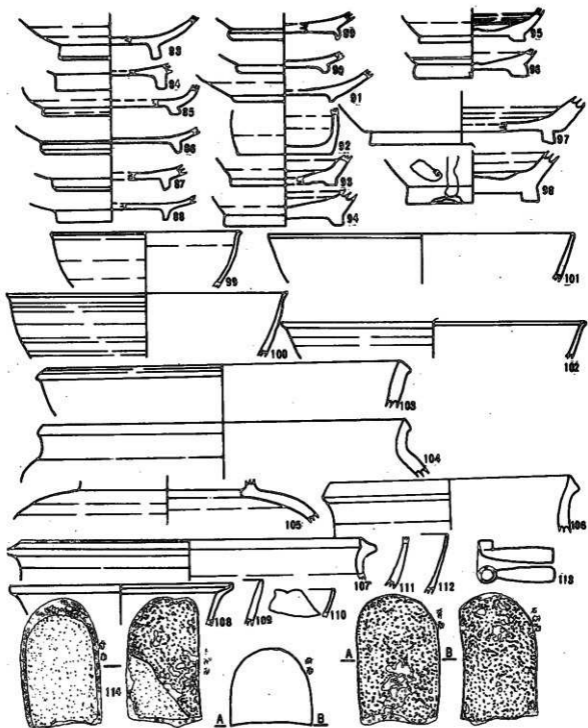
A類 74～91・99～102 碗形土器の底部に含まれるものとして74～91が、又、口縁部に含まれるものとしては、99～102があげられる。この中、底部は、高台のあり方から分類でき、基部から端部に僅かに集約しながら、垂直におりるものとして、75～80、88の7例があり最も多く、高台も高い。断面が方形状となる83～85の3例。断面が三日月状となる82、89の2例。端先を外へはり出す74、86などが特徴的である。90、91は、その高台が極めて低く、僅かばかりである。総じて底部より外傾の度を強めて、ゆるやかな立ち上がりを見せるが、85は早く内彎の様相を見せる。74、80、81、88、90の底部には、回転莖削の跡があり、74、79、82は、切りはなし後の付高台で、更に高台外側を轆轤調整している。灰釉は、75、77、80、83、86、88、89の内面に淡緑色となって残り、76の外表面と82、90の内外表面、91の内面に、白色不透明釉の流掛けの流れや、刷毛塗りがみられる。以上の他は無釉となる。陶土はいづれもきめ細かく良好であるが、87、90は暗灰色を、76、77、79、83、88、91が淡青灰色を、他は灰色をとる。

口縁部の99は、A・9の-50～-60cm出土、口径が13.6cmとなり、淡青白色の陶土で、内外壁に白釉の刷毛塗りがみられる。器厚0.2～0.3cmとうすく、口唇端部が100、102と共に僅かに外反する。100はA・8出土、口径は20cmで、外面に轆轤整形痕を残し、器の内外に淡緑釉がかけられ、壁面に光沢をもつ。101はA・5の-50～-75cm出土、102はA・8出土で、口径は共に22cm、器厚は0.3cmとうすい。やはり器の内外に、いづれも全面に灰釉がうすくかけられ、淡黄緑色、淡緑色を残す。99は小形、100～102は直径20cmをこえる大形の碗を示す。通常、大形の碗は、口径が15～18cm程度であるらしいが、時代の古いものほど、大振りのもので多いと言われる。概して大小の碗を、セットで使用している事例がみられるという。

B類 92～98・103～107 本類は数量的に少ない、瓶、壺、鉢形各土器を一括し、記述にあたっては、それぞれに分類して取扱うことにする。

瓶形土器は、92の1例で、B・7の-40～-60cmより出土する。暗灰色の胎土となり、轆轤右回転による糸切底の径は6.6cmである。内面に轆轤痕があり、内外面に部分的な釉薬がかけられ、僅かに淡緑色を帯びるが、窯変により青色がかったり、釉の剥落しているところもある。底部より胴部にかけて、やや内彎の傾向をもちつつ、直立してゆく小形瓶である。

壺形土器の底部を示すものとしては、93～98があげられる。共に高台を付け、内面にも轆轤整形



第9图 松工高道跡出土遺物実測图(3)

痕をもつ。93はA・9出土、底径は7.6cm。94はA・3の-80~-110出土で、底径は8.4cm。95はC・3出土で、底径7.4cm。96はA・7出土で、底径8cm。97はB・7の-40~-60cm出土、底径13.6cm。98はA・7の-50~-70cm出土、底径9.6cmとなる。高台は、いづれも肉厚、巾広となり、どっしりしていて安定感があり、断面は方形状を示す93と98の他は、いづれも高台外側が垂直におり、内側が斜めにそがれる特徴をもつ。釉は、93が無釉、94は外面が淡緑、内面は白色釉がかけられ、95の内面、96の内外面、97の外面には淡緑釉が施されており、98は、底部に轆轤右回転による糸切の跡をのこし、高台をもつが、それらの底部、高台を含め、外面が黒釉で全面に厚く覆われ、部分的に青色がかかる。この土器は、内面底部にも部分的な黒釉が残る。然し器肌や断面の色は、還元炎焼成による須恵器の青灰色をとっており、あるいは須恵器に帰属すべきものかも知れない。97は、高台と器の立上りの間に巾広いかえりがあり、大形壺の底部をおもわせるが、他は一律に高台基部より、直ちに胴部への開きをみせている。105はA・7の-50~-110cm出土で、変形土器の頸部と肩部接着部分の破片である。この部分の開口内径は、約10cmを記録する。肩部はやや外方へ張り出しながさがり、口頸部へは直立する器形を示す。外面へは全面に淡緑釉が施されている。106はB・6出土の壺形土器の口縁部である。口径は17.2cmで、口縁が僅かに外反し、口唇外側が斜めにそがれて、断面は三角状となる。内外共壁面調整を良くし、器全面に白色不透明の釉がかけられる。

鉢形土器に含まれるものとしては、103、104、107があげられる。103はA・6出土であり、口径は26.2cmを記す。無釉で濃い暗灰色を呈し、口縁は外傾して開き、口唇外側を斜めにおろして、ややひさし状の出張りをもつ。104はA・7出土で、やはり無釉の上、濃い暗灰色を帯びる。口径は26cmを数え「く」の字状に口頸部が屈曲している。おそらく肩部に張出しの最大径をもつ、器形となるものであろう。107はB・6出土、口径は26.4cmとなる。内外共、焦茶色となるが、製成後、二次的な火熱を受けて変色したものであろう。口唇が尖って立ち、外側へ張出しの突起帯がめぐり、短い頸部が集約している。

第5類土器（第9図108~112）

本類は青磁、白磁類をまとめた。108~112が該当するが、いづれも3cm角前後の細片で、全体をうかがい知る、資料には恵まれなかった。110の白磁を除き、他は青磁である。108はB・7出土、口径16cmの口縁部で、口縁がいちじるしく外反して有段となり、軽く立ち上がって縁どりを形成している。草緑色の釉葉が器の全面を厚く被覆し、ひび拗手法をとる。器厚0.3cmとすいが固く、碗形を示している。109はA・3出土、口縁部破片であるが、口径を割り出すところまでにはいかなかった。色調はいわゆる明るい青磁色で美しく、釉葉が全面に施される。外面には形押しによる蓮華文とみられるものがうかがえる。器厚0.4cmでやはり碗形を示す器であろう。110はB・2出土。若干、青味がかった光沢のある白磁で、器厚0.2cmとすく、口縁が輪花状を呈している。111はA・9の

-50~-60cm出土、暗緑色で覆われた底部に近い胴部破片で、器厚は0.4~0.7cmとなる。軸面に、はしづれが残る。112は、別項詳述の石垣遺構の下部から発見された、-140cmの砂利層出土である。表裏共、いわゆるカバ色を呈する口縁部破片で、碗形を示し、器厚0.2~0.4cmのうす手仕上げである。

土器以外の遺物（第9図113, 114）

土陶磁器類以外の遺物としては、キセルと砥石がある。この中、113がキセルで、A・4の-50~-80cmより出土する。完形品ではなく、キセルの先の部分の金物で材質は銅である。長さは5.3cm、太さは1cm、煙草の詰口は0.8cm円形を形づくっている。

114は、B・7の-50cmより出土した砥石である。材質は砂岩質で、黄灰色を呈する。自然礫をそのまま使用しているが、完形でなく欠損しており、当初の大きさは不明である。残欠部でみる形状は、断面半月状で、大きさは長さ8.8cm、巾5.7cm、厚さ5.3cmであり磨面を2箇所に残している。磨面の1箇所は、ほぼ全面に磨き込まれていて、5×7.7cm面が滑らかとなり、若干彎曲している。他の磨面は、いわば側面に僅かにうかがえるもので、3×6cm面が平滑となる。背面及び左右の側面には、人工による軽い叩きの繰返しによる凹みが残る。然しこの凹は、縄文期における凹石の如く、まとまったものではない。欠損部の断面が自然面と同色である点や、近世以降のいわゆる砥石とは異なり、かなり古い時代の砥石かと推察される。

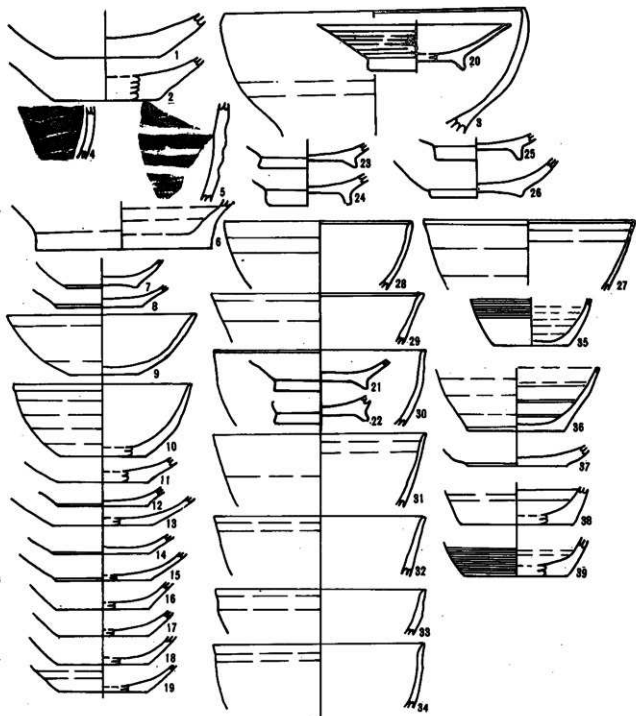
（大久保知巳）

2. 松本工業高校敷地内探査遺物

今回、松本工業高校敷地内遺跡の発掘調査に依り、明らかにされた遺構、遺物に対して、同遺跡周辺出土遺物も、直接あるいは間接に深いかかわり合いをもつものと思われるので、本遺跡の実態報告に伴い、ここに別項を設けて出土遺物を一括し、併せ報告にかえることとする。採集された遺物に完形品はなく、弥生土器、土師器、須恵器、灰陶磁器の各破片で、調査資料と年代や器形等の在り方をほぼ同じくするものであった。以下、これらの遺物に分類を試み、記述する。

第1類土器（第10図1~6）

弥生土器を取扱った。やはり数量的には他に比し微量で、採用し得る土器も1~6の資料にすぎなかった。1は壺形土器の底部とみられるものであり、平底で底径は7.4cm、器厚は底部厚が1.4cm、立ちあがり部が0.7cmと厚手である。内面は丹彩のため赤褐色であるが、外面は部分的に黒色部分がある。2も壺形土器の平底で、底径は7.6cm、器厚は、底部厚が1.7cmと厚く、立ち上がり部は0.4cmと細まる。内面は丹彩で赤くなり、外面はやはり部分的に黒色となる。いづれも基部より外傾の度を強めて開き立ち上がる。3は、かなり大形の高杯の口縁部破片である。内外共丹彩のため、赤褐色と



第 10 图 松工高敷地内外出土遺物実測図 (1)

なり、外表面には筈による薄い調整痕が残る。口径は2.16cmで、脚部よりゆるやかに立ち上り、口唇が内彎気味となる。4、5は松江遺跡発掘調査の折、同校西方近くの鉄塔工事現場から、筆者が表採したものである。4は器厚0.5cmの胴部破片であるが、内外黄灰色となり、やや山形を示す、三筋の平行沈線文がうかがえる。5は、器厚0.6cm、内面黄灰色、外面暗灰色の胴部破片である。横走する巾広の沈線が3本引かれ、その上下に痕跡的な縄文の転載が僅かに残る。6は壺形土器の底部破片である。内外暗褐色で焼成はよく、底径1.24cmを数え、木の葉文を記す平底である。器は一旦垂直に近く立ち上がった後、外反して開く。器厚0.7cmの中位である。

第2類土器（第10図、第11図7～52）

本類は、土師器をまとめた。器の種類としては杯形土器が大半をしめ、壺、甕、鉢形土器などが、僅かながらあげられる。これらをその特徴に応じて分類し整理する。

A類 7～19 杯の内、内面が黒色研磨され、外面は褐色となる平底の杯を本類とした。7～19が含まれ、この内10、13、19を除き、他はすべて轆轤右回転による糸切底を示す。器厚は概して底部が0.5cm前後、器壁が0.4cm前後となる。底径は7が5.4cm、8が5.7cm、11が6.6cm、12が6.4cm、13が7cm、14、15、16が6.8cm、17が6.4cm、18が6.6cm、19が6.4cmで、6cm代のものが圧倒的に多い。器の立ち上がりは11～15が外反しながら大きく開き、他は基部より円滑な立ち上りをみせている。この内、9、10は全体の器形を察知できるものであり、9は口径13.8cm、高さ4.4cm、底径4.7cm、10は口径13cm、高さ5.2cm、底径6cmで、共に外面に轆轤整形痕を残すが、仕上げは良い。

B類 20～26 杯の内、内面が黒色研磨され、外面が褐色となる高台付の一群が含まれ、20～26が該当する。高台のあり方から4分類できるが、器厚は底部が0.6cm、立ち上がりが0.4cm前後を示すものが多い。20は図上復元により、全体の器形を知ることができるが、杯というより皿形である。浅いながら大きく開いた口径は1.4cm、高さ3.4cm、底径は6.8cmである。器の内面は黒色研磨されているが、外表面は轆轤整形痕が明瞭に残る。高台は、外側がほぼ垂直にあり、内側が斜めにそがれて、断面三角状となり、高台踏面が細まる。21は底径6.6cmで、高台のつくりは20と同様であり、22は底径6.8cm、23は底径7cmで、共に高台のすそが外へ張り出し、内そぎとなって細まる特徴がある。24は底径6cm、25は底径6.2cmで、共に糸切後の付高台である。両者共、高台の断面は外側が垂直に近くあり、内側のそぎも少なく、ほぼ方形を呈する。26は底径6.6cm、やはり糸切後の付高台であるが、高台が、僅かな隆起線程度にとどまっている。

C類 27～34 内面が黒色研磨され、外面が褐色となる口縁部破片のみを集めた。27～34が含まれ、本類はA・B類のいずれかに属するものとみられるが、明確に区別しがたい。口径は、28が1.32cm。27、29～34は、いずれも1.52cmを記録し画一的である。これらの中、28、30、33、34は胴部が彎曲気味であるのに対し、他は底部より器の立ち上がりが直線的に開いており、器形の

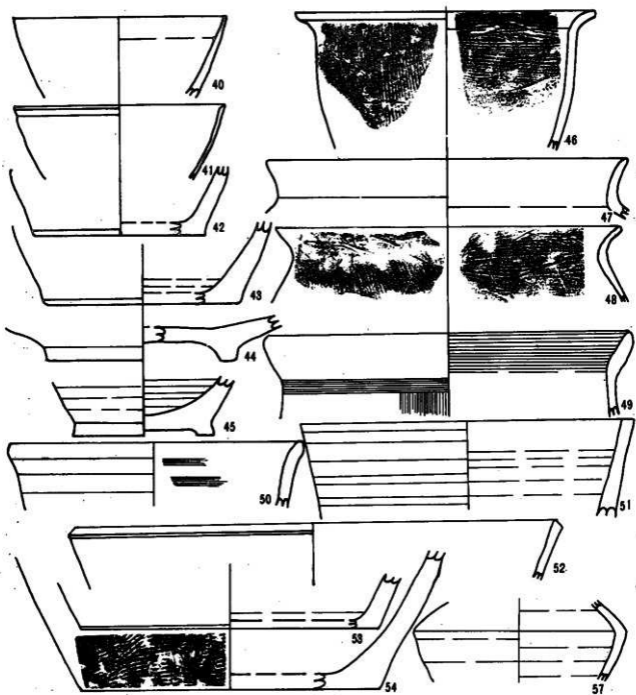
あり方をやや異にしている。又、34のみ、内外共、濃い黒色研磨土器となり、光沢を放つ。

D類 35~41 杯で内外が褐色となるものを取扱った。35~41が該当し、35~39は底部で平底を示し、40、41は口縁部破片である。底部の中、37は糸切底となり、35、36、38、39は、底部に回転磨削の跡が残る。35は底径5.4cm、外面に横位の整った櫛目文が連続し、内部は轆轤目が残る。36は底径6.8cm、内外面に轆轤痕があり、37は底径7.2cm、38は底径8cmで共に轆轤痕を内外面に残す。39は底径7.4cmで、外面に横位の櫛目文というより、浅い刷毛目が連続している。器の立ち上がりは、37が、いちじるしく外傾して開くのに対し、他は一樣に基部より口縁に向い、滑らかな曲線を示している。35は、やや小形である。40、41は共に口径が14cmであり、40は器厚0.6cmと厚く、口唇部が直行し、41は器厚0.3cmとうすく、口唇が僅かに外反気味となる相異をみせる。

E類 42、43、46~49 本類は変形土器で、42、43、46~49が含まれる。この中、42、43は底部、46~49は口縁部である。42、43は共に平底で、内外茶褐色となり、43の外器面には、縦方向の刷毛目擦痕が残る。底径は42が11.4cm、43が12.8cmで、基部より胴部への開度は共に中位となり、無理のない立ち上りをみせる。46は口径20cm、器厚0.4cmの薄手づくりであるが、内外赤褐色となり、焼成よく見事な整形を成す。外面に縦方向、内面に横方向の刷毛目文が全面に引かれており、口唇近くで急に外反して開口する。胴部への張り出しはあまりみられず、底部へ向い集約する。47は、口径24cm、黄褐色で、口縁部は僅かに立ち上がって外傾し、下部は横方向の肩へ張り出す。48は、口径23cm、器厚0.3cmであるが、内外赤褐色で固く仕上げはよい。外面に縦位、内面に横位の密な刷毛目整形痕が全面に残る。器は口唇が口頸部より「く」の字状に曲って開き、胴部にかけては張り出してゆく。49は、口径24cm、外面黄色で縦位の、内面は黒褐色の横位刷毛目文がある。器厚0.6cmで、頸部に於て、僅かながら縋り、口縁が僅かに外反する。

F類 44、45、50 本類は変形土器で、44、45、50が含まれる。44、45は共に高台をもつ底部であり、50が口縁部破片である。いずれも茶褐色で焼成はよい。44は、底径12.8cm、器厚1cmとなり、底部より大きく横へ張り出す器形をとり、45の小形に対し大形をおもわせる。高台は両者共ほぼ方形状におり、厚く太く安定感がある。45は底径9.4cmで、器厚1cmと厚手となり、基部から比較的早い立ち上りを示すものの、高台の踏面はやや不整である。内外に轆轤整形痕がある。50は口径19.4cm、器厚0.6cmで、外面に轆轤痕を残し、内面に刷毛目文を浅く残す。口縁はゆるやかに外傾している。

G類 51、52 鉢形土器で51、52が所属する。51は内外茶褐色で、口径22.4cm、器厚は0.8~1.2cmと厚く、口唇に巾広い面取りがある。内外に轆轤整形痕が顕著にみられ、器は口縁より直線的に底部へ向う。52は口径33cmと広く、やはり底部へ向い直行する器形を示している。黄灰色で焼成はあまり良好といえず、器厚も0.5cmと薄手で、口唇が外そぎとなって、頂部が細まる。



第11図 松工高敷地内外出土遺物実面図 (2)

第3類土器 (第11図, 第12図53~78)

本類は須恵器を一括した。器形として、甕, 杯, 杯蓋があげられるが, 杯類がその主体をなす。こ

れらを分類し記述する。

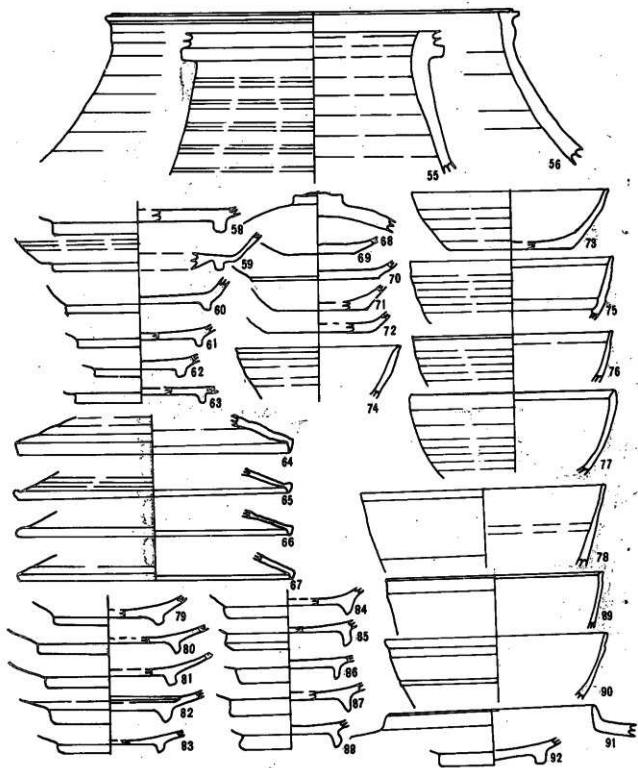
A類 53~56 変形土器で53~56が該当する。53は、平底の底径が20cmの文形變の破片で、外面に短く平行する直線状の印目痕が、器の全面に残る。内面には指頭による器壁への押圧痕が全面に残る。内外共いわゆるネズミ色(青灰色)をとり、焼成よく堅緻である。器厚は、底部が0.5cmとややうすいが、胴部は1cmと厚い。54は底径20cmとなり、器厚1cmと厚手であるが、底部は0.5cmとうすい。共にやや強い器の立ち上りを示す。55と56は口縁部破片で、55は口径17.2cmとなり、内外に轆轤痕を残す。又、内面は青灰色であるが、外面は黒色釉が全面にかり光沢をもつ。口唇上は現存巾1cmと広い面をとるが、外方へ更に伸びる部分があり、その部分が欠損して、本来の在り方が不明である。又、56は、口径28cmの大口となり、内外面に轆轤整形痕を残し、器肌に横位の凹凸線がある。55同様口唇上が、1.4cmの巾広い面取りとなり、器形もほぼ同じくし、肩から胴部にかけて大きく張り出してゆく傾向をみせる。おそらく胴部に最大径をもつ、大形變であろうと思われる。

B類 57 本類は、1例のみであるが57に示す平瓶を扱う。内外青灰色となるが、外面の平瓶上部面より、側面の一部にかけて薄黄緑の斑点状の自然灰釉がかかる。器厚0.5cmで、上部面と側面とを西す稜線は鋭く、明瞭であり、やや「く」の字状の体部屈曲を示している。内側面に轆轤痕を残す。

C類 58~78 本類は杯形土器を集め、杯、杯蓋、口縁、底部、高台の有無等により、それぞれの特徴に応じて分割し、記述する。

58~63は、高台をもつ杯の底部破片である。58は底径11.6cm内外茶褐色となるが、二次的な火熱を受けての変色であろう。底部内面に轆轤痕が、外面の高台内には回転調整の跡が残る。59は底径11.6cm、底部外側を肥厚させており、断面は不整形となる。高台の外側と器の立ち上りの間に、若干かえりが設けられ、底面を広くしている。60は松工高校の東畑より採集したもので、底径は9.8cmとなり、器の内外面は暗褐色を帯びる。61は底径が8.4cmとなり、62は底径6.2cmとなって、高台内部に轆轤右回転による糸切痕を残す。63は底径が8.8cmとなる。高台は、いずれも方形状で直におりるが、58が肉厚となるものの、他は一樣に細く小さいものとなり、61は、高台がしるしばかりとなる。58、59は、やや大形杯の底部をおもわせ、60は中位の、他は小形の杯を感じさせる。

64~68は、杯蓋の一群である。64~67の蓋の口径は、いずれも18.6cmとなり、やや大形の部類の杯蓋を示している。64は、外面黒褐色となり、内が青灰色となる。端部は直角に近く折れて、約1cmのかえりを記し、その先端が尖る。65は、内外青灰色を呈し、端部を若干丸めて蓋先につけ、かえりとしており、特異である。66は暗灰色、67は暗褐色を呈し、蓋先端に僅かばかりのかえりをもつ。68は、先端部を欠く、つまみの部分である。つまみは3×3cm、厚さ0.5cmの扁平なもの



第 12 图 松工高敷地内外出土物実測图 (3)

で、器厚は、やや肉厚である。

69～73は、いずれも平底の杯底部で、すべて轆轤右回転による糸切底となる。69の底径は4.6cmで、小形土器を示し、底部の調整は雑である。70は底径8cmで、図上復元により、その全体を知ることのできるものである。それによれば、口径は13.3cm、高さ3.9cmで、小ぶりの杯ということがができる。外面に轆轤痕がある。71は底径6cm、72は底径7cmで総じて小形となり、73は図上復元で、全体の器形を知るが、底径8cm、口径13.3cm、高さ4cmである。

74～78は、杯の口縁部破片である。いずれも外面に轆轤痕を残し、青灰色を呈する。74は口径11cmの小形土器となり、75～77は、いずれも口径が13.6cmを記録する、中形土器となるが、75、76が口唇を僅かに外反させるのに対し、77は内外面より集約して直立する。78は口径16.2cmでやや大形となり、口唇に面取りがあって、底部より口縁へ直線的な開きをみせる。

第4類土器（第12図79～91）

本類は灰釉陶器を包括する。器形は、91に示す壺形土器1例の他は、すべて碗形土器である。碗形土器は、79～88までが、いずれも高台ぶきの底部となり、89、90がその口縁部破片である。

碗形土器の中、底径は、79が7.4cm、80が9.6cm、81が8.8cm、82が8.4cm、83が7.2cm、84が8.6cm、85が8.2cm、86が6.6cm、87が8cm、88が6.5cmと、それぞれ異なる数値を示して一様ではない。79の高台内は、轆轤右回転の糸切痕を残し、他の底部は精製してその跡をのこさない。81の内外面には白色釉が、82の内外面と83、88の内面には、淡緑釉が刷毛塗りがされており、他には釉薬を認めない。又、82の内面底部近くには、僅かな段差があり、段付碗を形成している。高台は、方形に外へふんばりの傾向をみせる79～81や、高台外側先端がけずられて、内側と集約する断面鴛鼻状の82、83、85、88や、底部より直におきる84、86、87などがある。それぞれ外傾の度をまして、器は立ち上がる。

91は唯一の壺形土器の口縁部であり、口径は14cmを数える。外面には厚い灰釉がかけられ、いわゆる緑釉とは異なる色釉の濃緑色を呈し、光沢をもつ。口縁部の立ち上がりだけを僅かにして、横の肩部へ張り出しを強くしており、内壁共によく精製された土器である。

第5類土器（第12図92）

本類は92の1例のみである。外面に鉄釉が、内面に黄白釉がかけられた、高台付の底部破片で、その底径は7cmである。碗形土器を示すとみられるが、内外面の釉薬や、内面の細かなびび焼手法からして、製成年代は、大きく下降するものと判断される。

（大久保知巳）

第 3 章 結 語

松本工業高校遺跡は、同校に隣接する周辺遺跡地帯の一部をしめるもので、かねてより識者によって、周辺地帯の遺物の表採が行なわれたり、又、同校に於ても、かつて運動場造成の際や、敷地整備の折など、多量の土器類の出土があって、学校当局者や遺跡パトロールの神沢昌二郎氏らの関心が寄せられ、大切に保蔵されてきた。今回はからずも同校校庭の遺跡発掘調査がなされることになったもので、濃密で広範囲に亘る遺跡の一角が明らかにされることに、大きな期待がもたれた。

同校の北を、東西に流下する、薄川の両縁地帯には、別章、周辺遺跡の項でも詳述の如く、多数の遺跡が分布しており、然も開発工事等の折には、それぞれの遺跡より、多彩な質量の遺物出土など報ぜられてきた。にもかかわらず、この地帯に於ける遺跡調査は、昭和45年12月末に発掘調査された、女鳥羽川遺跡や、南方の山頂に位置して発掘調査された中山36号古墳、弘法山古墳等の他は、全く未調査で、各遺跡の内容なども立体的な把握はなし得なかった。特に東日本國一、信濃最古をほこる弘法山古墳は、規模も稀にみる大きなもので、これを構築した権力者はもとより、その膝元において、これを支える背景となった、地域住民等の所在が考えられるわけであるが、それらの実態が明らかにされず、立証がなされないままにきたのが実情でもある。かつて弘法山古墳発掘調査の折、この古墳の存在を直接、間接に裏付けるものとして、同古墳をとりまく周辺の、出川、神田、筑摩各地区、更には、薄川を隔てた果・源池辺まで、綿密な遺跡分布調査を実施し、不完全ではあるが、遺物面による年代的な歴史文化の推移と実態の把握、併せて集落存在の確認をも夢みたものであったが、それらもなされずじまいで、今日まで来た。それらの意味あいもあり、今次発掘には、多角的な面からの期待が寄せられる。

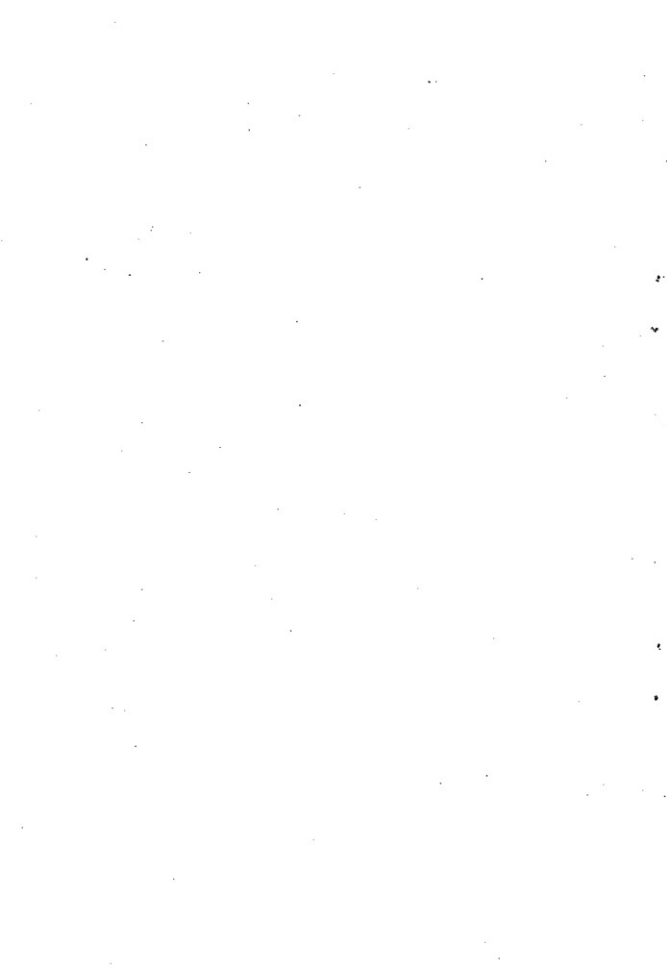
発掘調査の結果では、出土遺物に該当する住居址等の遺構には、残念にも恵まれず、該地点が、おそらくこの地帯の近くに存在するであろう集落の縁辺から、外れた場所であることがわかって、その点惜しいことといわなければならない。発掘地は、第2図にみられる如き位置をしめるが、同校敷地造成以前の該地は、第6図で知れる如く、堰派2494番地、堰派2495番地、廃道敷2487の2(旧道)の所在箇所相当しており、この地が微地形的に、北東部を低所とし、南西部を高所とする。北東より南西方向に伸長する段丘縁が走行していて、近くの北側段丘縁には、堰の流れがあったことが知れる。おそらく、集落はこの堰を境とした、北部段丘上に立地していたのではないかと想像されるが、その地帯の現況は、松本工業高校の校舎が建立されている。

出土遺物からの所感では、先づ上限を示す弥生土器が、数量的には稀薄であったが得られた。これらは発掘地点でみる限り、丹彩で無文となる弥生中期の百瀬式に相当しており、高杯形土器の口縁部や、断面船底状を呈する沈線が3条横走し、その上下に縄文が施文される胴部破片、あるいは壺形、

変形を示す土器片などが得られた。降って、土師器、須恵器、灰釉陶器類は、近くの塩尻市平出遺跡の福年に準拠し、分類した場合、発掘によって出土した第7図33、あるいは敷地内既出の第11図47、48の壺乃至変形土器は、第2様式第3類に含まれ、敷地内既出の第11図49は、第3様式に所属し、共に鬼高期に相当する。又、多量に出土した杯類の中、内黒で平底あるいは高台を付すもの、須恵器で平底に糸切手法のみられるもの、高台のあるもの、これらとほぼ年代を同じくする灰釉陶器の碗形土器が混在しており、平出第5様式にその殆んどが相当するものであることがわかる。勿論、細別すれば、第5様式の中でも、平底の底部に角がなく丸みをもつ杯や、高台が直におりる古い形状を示すものがあり、又、高台が外傾して開く漸移的なものもあるわけで、かならずしも一様ではなく、時間的な前後関係を示すもののあることは、事実である。この第5様式は、国分期に対比されるもので、同期の中でも古い時代の所産といえることができる。又、第8図72、73の如く、粘土紐の隆帯が胴部に囲周する、類例のすくない変形土器なども認められた。青磁、白磁も数量的にはすくないが、限られた僅かな発掘地より、破片とはいえ5点出土したことは、他に比較して多ということができる。又、112の青磁は、石垣遺構の約30cm下(表土下140cm)の河原砂利層より検出されたもので、石垣の構築年代を決める、貴重な資料でもある。唯一の砥石は、その欠損部や磨面が、他の自然面と同色に表面風化しており、明らかに現代のものでなく、古い時代のものであることが知れる。おそらく土師時代所産のものであろう。

今回の調査によって明らかにされた如く、この地に営まれた古代人の生活文化は、遺物面から、弥生時代中期にその足跡を記し、下って6世紀の鬼高期に相当する壺、甕の破片を微量残し、更に下って平安期のなかばより後半にかけて、大きく展開し、該期に相当する遺物を濃密に残すが、これが本遺跡の中心をなすものと考えられる。4世紀後半代、弘法山古墳築造期の背景となる資料は、ここでは得られなかった。むしろ年代的には、本遺跡と地理的に近接する、塩原の官牧や、中山古墳群の構築が営まれた時代以降で、信濃国府が松本へ移駐されて、間もなくの時代が盛期かと思われる。又、遺物面から、平地部に於ける、農耕生産的な場ではなかったかと推考される。然しながら、薄川の氾濫等により、居住の立地条件を悪くして、いく度か出入りがあったものとも思考される。いづれにしても、松本市南東部のこの地帯は、古代の黎明期に相当する、古墳や諸遺跡の広範に密集する地帯であり、今回の調査結果が多小共、今後の古代史追求の上で活用されるならば、そこに意義と成果を求めたいものである。

(大久保知巳)

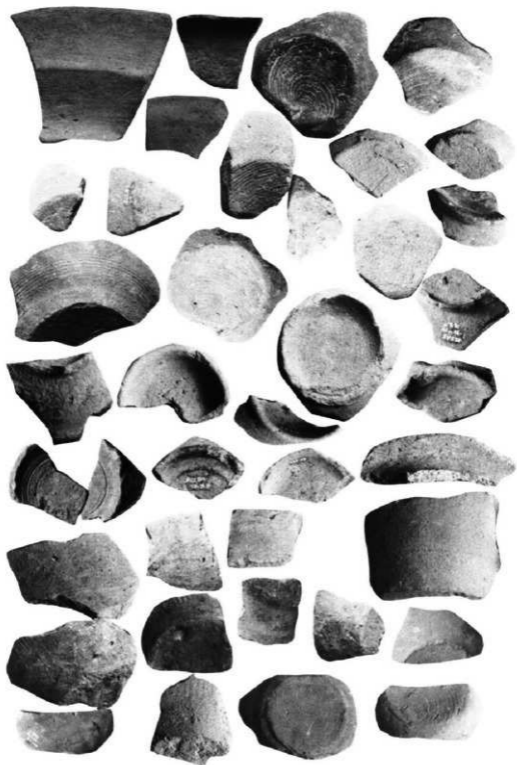




図版 1 発掘地点全景（東より）



図版 2 石垣遺構（北端部分）



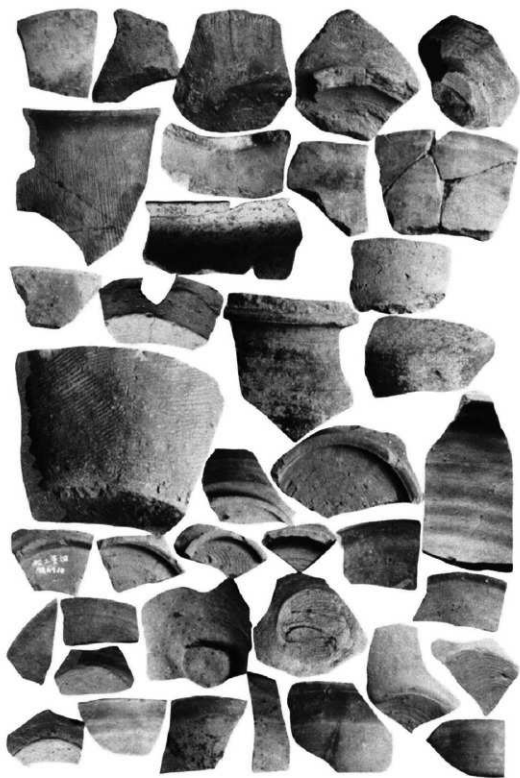
图版 3 出土遺物 (1)



図版 4 出土遺物 (2)



図版 5 松工高敷地内外出土遺物 (1)



图版 6 松工高敷地内外出土遺物 (2)